

不登校の中学生への効果的な宿泊学習の検討（1）

—— 社会的自立を目指した集団プログラムの開発 ——

木村 文香*・中村 干城**・橋本 空***

要 約

宿泊を伴う自然体験学習は、福祉的側面からの支援の必要性が高まる中、情緒的側面のみならず健康行動の側面への効果も含めてその評価を見直しする必要があると考えられる。実際に、4泊5日を基本として、不登校の児童、生徒を対象としたプログラムが行われているが、その評価については、社会的自立までを包括的に視野に入れたものがなされているとはいえない。そのため、有効なプログラムの開発を行うことも難しい状況である。本稿では、構造化されたプログラムを開発し、その成果を質的な側面から検討した。その結果、プログラムの構造化によって宿泊学習プログラムは一定の成果を示すことが示唆された。

キーワード：宿泊学習、グループダイナミクス、発達障害

はじめに

社会の構造変動に伴い、学校不適応に陥ったり不登校となる子どもは増加を続けてきた。これに対し適応指導教室、情緒障害児学級やスクールカウンセラー制度などが整備され、学校不適応の児童・生徒の心の問題への個別ケアの体制は、ハード、ソフトの両側面から整いつつある。

しかし、2009年に内閣府が行った「高校生活及び中学校生活に関するアンケート調査」の結果によれば、中学3年時に不登校であった生徒のうち16.5%は、中学卒業後3年経過時に「仕事にはついておらず、学校にも行っていない」状態にある(内閣府政策統括官, 2009)。このことから、現在の支援体制によるニート化の予防は必ずしも十分とはいえず、社会的自立が支援できていると

はいえない。2003年4月に文部科学省より出された「今後の不登校への対応の在り方について」報告でも指摘されているように、不登校や学校不適応者に対し、将来の社会的自立に向けた支援が重要な課題となっている。

恒常的な社会適応である社会的自立を獲得するための支援において注目すべきは、子どものウェルネスである。ウェルネスとは「健康を維持するための社会・情緒的なコーピングスキルを含む身体的・精神的な健康」であり、個人的なウェルビーイング、アイデンティティの発達の他、学業達成度や精神的な意味の追求のような個人的な目標の達成を含む、健康の最低限の基準を超えたものである (e.g., Maton et al. 1998; Maton & Wells, 1995)。つまり、個人の情緒や対人関係のスキル、生活習慣を相互に関係するものとして包括してとらえた心身の総合的な健康のことであり、これを獲得することで、心身ともに安定して社会とのつながりをもつことができるようになり、社会的自立へとつながると考えることができる。適応とは、人と環境の「両者が調和した良い関係にある状態」

2010年11月30日受付

* 江戸川大学 人間心理学科専任講師, 教育臨床心理学

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科, 健康科学, 発達心理学

*** 江戸川大学 人間心理学科専任講師, 健康心理学

であることから（福島，1989），ウェルネスの獲得によって，適応が得られるとも考えられよう。

近年の学校不適応には，家庭環境が背景にあるものも多く，格差社会化と「子どもの貧困」の問題が指摘され，脱落型不登校との命名もみられる（保坂，2000）。これに伴い，家庭での健康的な生活習慣の未確立という問題が指摘されており，また健康的な生活習慣の未確立は，ウェルネスの獲得を遠ざけ，社会的な自立を妨げる要素の1つと考えられる（木村，2007）。子どもの生活習慣面も含めた家庭生活の支援については，2008年度にスクールソーシャルワーカー導入の試みも行われたが，未だ十分な支援システムが確立されているとはいえない。

このような中で注目すべき実践の1つとして，宿泊を伴う自然体験活動を通じたグループワークを挙げることができる。自然体験活動は，1992年に文部省（当時）による「登校拒否問題への対応について」通知において，「社会教育施設を利用して行われる登校拒否児童生徒の適応指導のための自然体験活動等の事業の推進を図ること」との文言で，学校に行かない児童・生徒への支援策の1つとして取り上げられ（文部科学省，1992），いくつかの研究がその有効性を示唆している（e.g., 坂本，1988a, b; 兄井，2004）。

実際に，情緒障害児学級や適応指導教室では，これまでも宿泊を伴う自然体験活動がしばしば実施されてきた。しかし，その成果についての研究は，自然体験活動が対人関係のモチベーションやパーソナリティなどの個人の心の問題の及ぼす効果にのみ焦点化されており，ウェルネスの増進や社会的自立への効果を包括的に検証したものはほとんどみられない。

本研究は以上のような背景をうけ，学校不適応の中学生を対象に，グループワークを中心とした宿泊を伴う自然体験活動のプログラムを開発し，その成果から，これまでのプログラムにおける問題点の整理と改善点を検討する。

宿泊を伴うプログラムの背景

文部科学省は，2002年より「豊かな体験活動推進事業」を実施している（文部科学省，2009）。これは，近年の「高度情報化や都市化，少子化といった社会の変化に伴い，子どもについて社会性の不足，生命の尊重や基本的な倫理観が不十分であるといった指摘」を受け，既に小学校から高校までで取り組んでいる体験活動の，さらなる拡充を目指すものである。あわせて，体験活動を推進する必要性の背景には，「子どもの意欲や協調性の欠如が指摘されており，生活や学習における意欲や，知識やノウハウを実践に結びつける力などの『人間力』，『社会人基礎力』等社会人としての基礎的な能力の養成・強化を図る」という目的があるとしている。また，学校教育の場での体験活動への取り組みは，「規範意識や社会性等を養う機会の確保」と，「平時とは異なる児童生徒の様子を見取ることによる児童生徒の新たな一面の発見」をもたらすとし，学級経営の向上につながるという成果も期待されている。その一方で，「体験活動の理念の浸透や実施の際のノウハウ等は依然として不足している状況にある」ことも指摘されている。

体験活動の実態については，児島ら（2007）が，子どもと教諭を対象とした大規模な全国調査を行っている。これによると，学校で取り組んでいる体験活動の種類の内，最も多いのは「自然に親しむ体験活動」（85%）であり，続く「ボランティアなどの社会奉仕的な体験活動」（68%）を大きく引き離していた。前述の「豊かな体験活動推進事業」の内容である「オリエンテーリングなどの身体的な体験活動」「地域間交流」「集団宿泊体験」への取り組みは，それぞれ順に22%，22%，24%と少なく，このこと自体が課題として指摘されていた。また，同調査によると，学校側が体験活動に期待している教育効果としては，「人間関係形成力の育成」（91%），「集団の中での適切な行動」（85%），「規範意識・モラルの向上」（68%）といった，社会的な諸能力の育成が重視される傾向にあった。さらに，「将来の進路や仕事への関心」

(54%),「自立心の育成」(52%),「学習意欲の向上」(51%)といった子ども自身の自己形成への期待も半数以上でみられた。実際に、5日以上長期宿泊体験活動を行った学校を対象に、得られた効果と課題を尋ねた質問に対しては、人間関係の形成と、自立性の育成についての効果が高いとの回答が得られていた。課題としては、「財政的な支援」「時間の確保」「活動内容の企画立案」「指導員や指導補助者の確保」が挙げられていた。

以上のような取り組みは、特に学校不適應などの問題を抱える子ども達を対象としていないが、目的が「社会的緒能力の育成」と「自己形成」であることから、十分、適用が可能であると考えられる。

実際に、不登校や不登校傾向の小学生や中学生を、宿泊プログラムによって支援する教育機関として、兵庫県教育委員会によって但馬やまびこの郷が設置されている。1996年に始まったこの事業では、4泊5日を原則としたプログラムが生まれ、実際に効果も上がっているとされている。具体的なプログラムについては、図1に掲載した。

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
7:00	/	起床	起床	起床	起床
		朝食	朝食	朝食	朝食
9:30		料理を作ろう	自分で選ぶ活動(製作・文化)	遠くへ出かけよう	片づけ 清掃 お別れ会
12:00		昼食	昼食	昼食	昼食
13:30	出合いの集いお互いを知ろう	地域と交流しよう	自分で選ぶ活動(スポーツ)	/	/
18:00	夕食	夕食	夕食		
	入浴	入浴	入浴		
	やまびこタイム	やまびこタイム	やまびこタイム		
22:00	就寝	就寝	就寝	就寝	

図1. 但馬やまびこの郷の基本プログラム

宿泊学習プログラムの開発に先立ち、この但馬やまびこの郷において、プログラムの企画、運営の実態について、聞き取り調査を行った。はじめに、この聞き取り調査の結果について報告する。

インタビュー調査実施時期 2010年8月上旬。

インタビュー対象者 但馬やまびこの郷スタッフ（中学校教諭）

はじめに、自然の豊かな環境において、このような事業を展開するメリットとして挙げられたのは、「身体が動けば、心が動く」という考え方であった。また、全体を通してのスタッフの関わり方の姿勢としては「聞く」「待つ」「よりそう」の3つが挙げられていた。これは、本人たちの思いを聞き、意志決定の返事を待ち、相手に寄り添って合わせるということである。また、その都度、具体的にほめることで、子ども達を認め、健康な部分を引き出すような関わりをしている。以下、この考え方に基づいた運営について、インタビュー調査の結果を述べる。

利用者について 対象は小学生と中学生である。1年間のべ利用者数は300名強であるが、リピーターが多く、実数はその半数くらいである。

進路について 中学3年生の時点で、やまびこの郷と関係が継続した生徒の場合、高校進学率は100%であり、退学率も低い。これは、中学生までしか利用できない当該施設を卒業後、高校生になってから、連絡をとってくることから実感もあるとのことであった。

「リピーター」が多く存在していることの意味
長期滞在ではなく、4泊5日の短期宿泊型の施設であるが、これは、この施設の機能として、日常の居場所としての機能を求めず、非日常の場としての提供にとどめたいという思いがあるからである。何度もやまびこの郷を利用する、いわゆる「リピーター」については、「エネルギーチャージ」の場所としての意味を、当該施設がもつと考えている。学校に継続して通えるまでのスキルが、まだ十分に備わっていないため、エネルギーの補給が必要だという解釈である。しかし、スキルが備わってくると、「やまびこの郷が居場所」という状態だったのが、だんだん「いつでも、そこに存

在しているのはわかっているが、わざわざ行かなくてもよい」場所となり、そうなると、リピートせずに、学校に継続的に通うようになっている。したがって、このような形で利用率が下がった子ども達は、同窓会的なイベントには参加する。利用に関しては、いわば「フェードアウト」するというのが、理想的な形である。また、利用後の目標として、すぐに原籍校への継続的な登校を掲げているわけではなく、適応指導教室へのつなぎという側面ももっている。

ケースマネジメントについて 申し込みは学校を通して行う。そのため、はじめに原籍校から、子ども達の様子について連絡がある。実際に足を運ぶ担任や不登校対応担当教諭もおり、情報交換を密に行っている。それ以外にも、個別に親のカウンセリングを通して情報収集をしている。その次に、所内で所長（臨床心理士）と共に、ケース会議を開き、方針を決定する。この時点で個票の作成も行う。この時点で、やまびこの郷での集団宿泊経験が不相当という判断を行い、他の機関を勧めることもある。

他機関との連携について 特別支援学級、特別支援学校、精神保健福祉センター、子ども家庭支援センター、単位制高校や不登校経験者の受け入れの多い高校との関係機関懇談会を開催している。そのため、中学卒業後の進路や、地域での社会的自立に向けた支援も行っているといえる。

プログラム終了後の定着に向けた働きかけ やまびこの郷での宿泊プログラム時は、規則正しい健康な生活習慣の下で生活を送っている。また、起床後も「楽しい」と感じられるプログラムが用意されているなど、少なくとも「起きてからすることがない」という状況はない。しかし、帰宅後の状況は同様とはいかず、プログラム参加前と同じような、結果的にひきこもりへとつながる、昼夜逆転の生活に戻ってしまう可能性が高い。そこで、プログラム終了後に帰宅してからも、健康的な生活習慣を維持するために、やまびこの郷では

たきかけているのは、「帰ってからの生活プランニング」に関する指導である。具体的には、家の中でできることをリスト化したり、起床後にすることを示せるようにするなど、具体的な目標を定めることである。さらに、これを保護者と共有する。その上で本人には、リピーターとなることを前提に、次にやまびこの郷を利用する際（2週間～2ヶ月後）に、その結果を尋ねるという約束をしている。次の利用時までの課題の設定が、生活の枠組みの設定となっているということでもある。利用する子どもの多くの家庭では、枠組みがなくなっている場合が多いため、ある程度の枠組みを設定することが、効果的になる場合も多い。

プログラムについて 全体を通して感じているのは「集団の力は大きい」ということである。しかし、集団の大きさと、参加する子ども達には相性があるため、「少ない時を教えて欲しい」との希望もある。そのため、集団のサイズが大きい場合と、小さい場合を意図的に作るようにしている。個々のプログラムについては、はじめは施設内、その後、施設の外へとつなげるような形にしている。また、3日目（水曜日）と4日目（木曜日）は、心身に負荷をかけるようなプログラムとしている。3日目は、午前、午後共に「自分で選ぶ活動」としている。これは、自己決定を目的としたプログラムであり、それまでの2日間は、「周りについていけばいい」というプログラムだったのに対し、3日目は、自分で決定をする場面が出てくるプログラムである。特に3日目の午後は、身体を動かすプログラムであり、目的は「身体を動かすことの楽しさを知る」というものである。しかしそれ以上に、参加している子ども達の多くは、「人に決められずに、自分で決定できる」ということで、楽しみにしているようだ。さらに4日目のプログラムは、車等で遠くに出かけるもののため、身体的にも負荷がかかるものである。その準備として、前日に自己決定のプログラム、身体を動かす楽しみを知るプログラムを入れているため、特に抵抗なく移行できることが多い。

まとめ 以上のように、やまびこの郷では、空間の非日常性を視野に入れた上で、プログラム同士のつながりを考え、またプログラム実施中に見られた、参加者たちの健康な側面を、終了後にどのように活かすのかといった点まで、具体的に指導を行っている。しかしその一方で、集団の大切さ、効果を実感し、活かしているものの、その評価についてはグループダイナミクスを十分に活かしているとは言い切れない感が残った。そこで、本研究では、グループダイナミクスに焦点を当てて、プログラム開発を行い、検討した。次節では、このプログラムについて述べる。

宿泊学習プログラム開発に関する事例研究の概要

本節では、宿泊学習プログラムの開発に関連して行われた事例研究の概要を述べる。

目的 情緒障害を理由として不登校、もしくは不登校傾向となった中学生を対象として行った宿泊学習プログラムの開発と効果の検討を行うことを目的とする。プログラムの開発に際しては、図2のような概念モデルを用いた。このモデルは、個人が社会や、より大きな環境の中核に位置づけられ、しかも各層が相互作用的な関係性の中にあるとした、コミュニティ心理学に基づくモデル(図3; 笹尾, 2007) を基にしている。このモデルを構成している要素を、今回のプログラム開発に合わせて再構成したものが図4である。この図4に基づいて、個人が社会や環境へとつながるプロセスを図示したものが図2であり、本研究における仮説概念モデルとして採用した。冒頭でも述べたように、適応の定義が「人と環境の両者が調和した良い関係にある状態」とすれば、図4のような図において、個人が円の中心として調和する状態が、適応している状態と考えることができる。

方法 200X年9月に実施された情緒障害学級における宿泊学習においてプログラムを実施し、その成果を質的、量的に検討した。なお、量的な

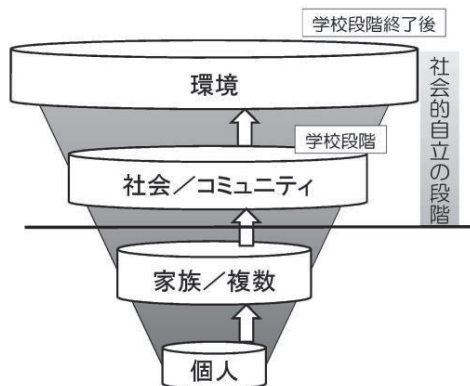


図2. 個人から環境との調和に向けたプログラムの概念図

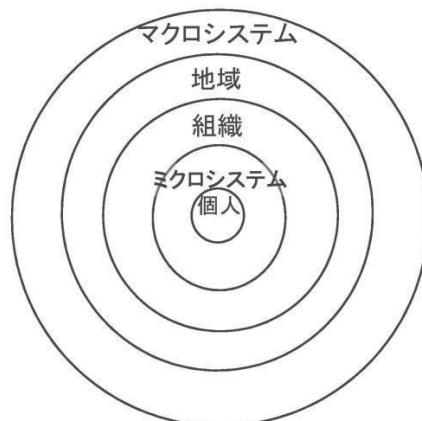


図3. コミュニティ心理学における多次元レベル (笹尾, 2007 より)

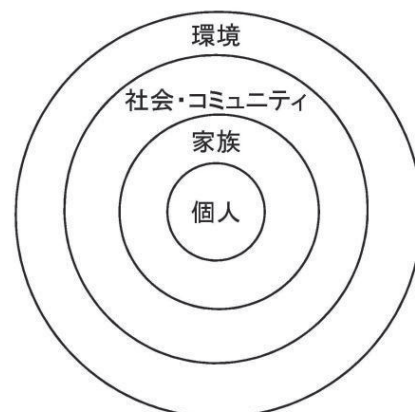


図4. 環境に占める個人の位置

データに基づく個別の変化に関する検討の結果については、橋本他（2011）を参照されたい。

対象者 対象者は、情緒障害学級に通級している中学生16名（男子8名、女子8名）。

プログラムの実施協力者 情緒障害学級の担当教諭4名（男性2名、女性2名）、心理学を学び、訓練を受けた大学生5名（男性3名、女性2名）。なお、プログラムの実施協力者と実施者（筆者）をあわせて「スタッフ」と表記することとする。

プログラムの特徴

表1. 宿泊学習の日程

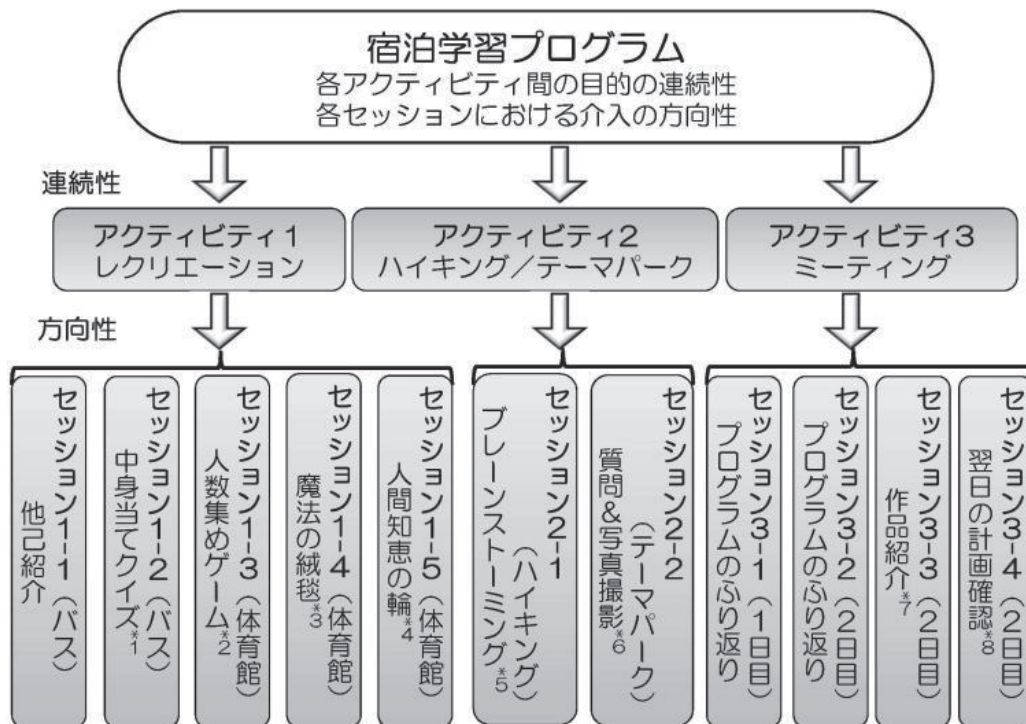
	1日目	2日目	3日目
午前	バス移動	ハイキング	テーマパーク体験
午後	牧場での体験学習	工芸体験	バス移動 ふり回り
夜	学級レク ミーティング	合同レク ミーティング	

本節では、今回の事例研究において開発したプログラムの詳細を述べる。本プログラムの目的は、「個別対応だった生徒も含め、学校不適応の状態にある中学生が、集団に適応できるようになること」である。

宿泊学習は、2泊3日で実施された。大まかな日程は、表2のようであった。また、部屋割りとハイキング、テーマパーク体験は、いずれも男女別で構成された班を基準に行動した。

また、プログラムは、アクティビティによって構成され、アクティビティは、それぞれ下位レベルにセッションを擁するという構造とした。本プログラムにおける、アクティビティとセッションは、以下の図5のようになっていた。

今回のプログラム開発において、特に企画から運営まで、学級の担当教諭と相談しつつ焦点を当てたアクティビティは、1日目のバス移動時のレクリエーション、体育館での学級レク、2日目のハイキング、3日目のテーマパーク体験、1、2日目夜のミーティングと3日目に学校に戻ってからのふり回りであった。この他、当該学級にお



註) 各セッションの内容については、表3にまとめた。

図5. プログラム、アクティビティ、セッションの構造

表 2. 各セッションの内容

セッション	内容
*1:「中身当てクイズ」	中に身近な物を入れて、バス席の最前列から、列ごとに後ろにまわす。各列で中身を予想し、当てる。早く当てた列が勝ちである。
*2:「人数集めゲーム」	ルールは、レクリエーションのディレクター（推進者）の拍手の数をよく聞き、その拍手の数と同じ人数をできるだけ早く集めるというものである。
*3:「魔法の絨毯」	4～6人程度ずつの各グループのメンバーが全員レジャーシート（＝魔法の絨毯）の上に乗ったままの状態、その絨毯を裏返すというもの。レクリエーションのディレクターの指示通りに、レジャーシートをたたむなど、魔法の絨毯のサイズを変えるというものである。
*4:「人間知恵の輪」	4～6人程度ずつの各グループのメンバーが、近くにかたまった状態で適当に手をつなぎ、それを順にほぐしていくことで、1つの大きな輪を作るというものである。
*5: プレーンストーミング (ハイキング)	本プログラムにおいては、日頃生活している環境と、ハイキングで訪れている場所の違いを、できるだけたくさん挙げるというものであった。
*6:「質問&写真撮影」 (テーマパーク)	テーマパークのスタッフに、宿泊学習開始前に調べてあったことから質問を行い、あわせて一緒に写真撮影を行うというものであった。
*7: 作品紹介	*7: 工芸体験において個別に作成した作品を、写真に撮り、男女別でカタログを作成した。作品紹介は、このカタログと、実際に完成した作品を見せながら、1人ずつ自分の作品を紹介するというものであった。
*8: 翌日の計画確認	本プログラムでは、3日目にテーマパーク体験が設定されていたため、テーマパークにおける「質問」について、行動を共にするグループ内で、確認を行うというものであった。

註)「*」と数字は、図5とリンクしている。

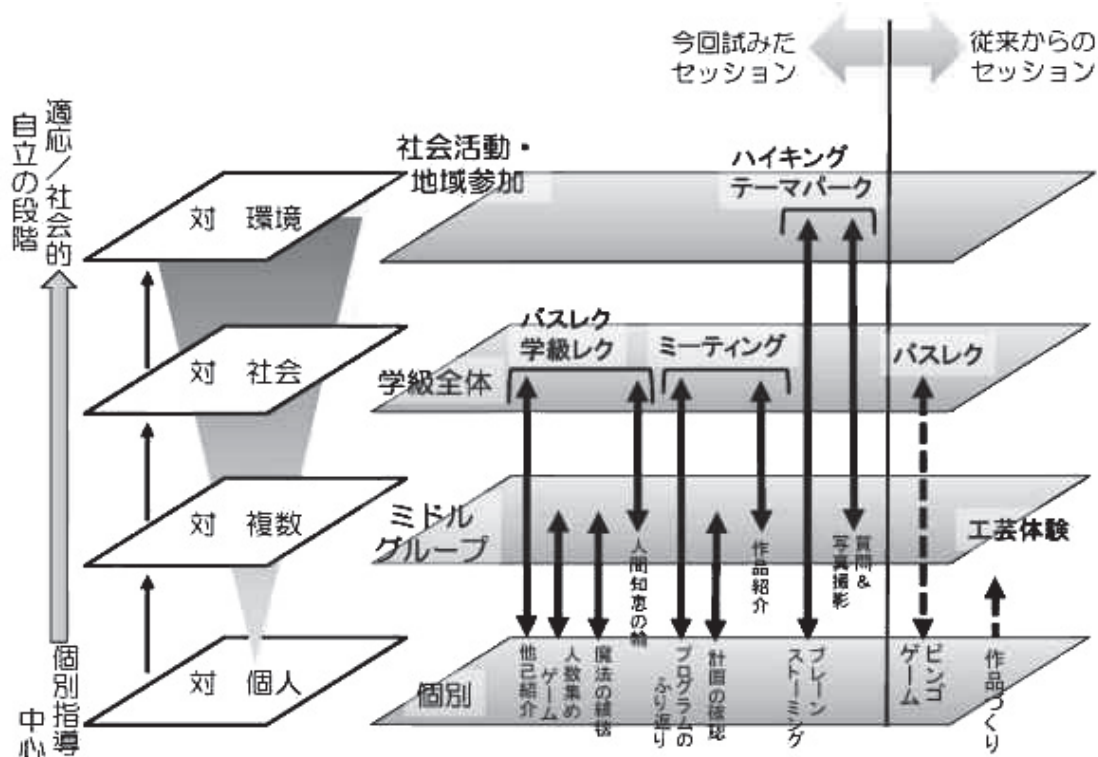


図 6. プログラムと概念モデルの関係

ける宿泊学習において、以前から行われており、特に新たな試みを行わなかったセッションは、バス内でのビンゴゲーム、工芸体験であった。

これらのアクティビティ、セッションについて、図2の概念モデルに当てはめると、図6のようになった。なお、それぞれのセッションの内容については、表3にまとめたとおりである。

グループマネージメント上の目的

図6に示した各アクティビティを行うにあたり、グループマネージメント上の目的は、より「適応／社会的自立の段階」に近い、上位の段階につなげることであった。セッション実施時にスタッフが行った介入は、全てこの目的の達成を意図したものである。

また、レクリエーション、ミーティングの司会は、いずれもスタッフのうち「リーダー」、「ディレクター（ハイキング時）」の立場にある者1名が行った。今回のプログラムにおけるセッションでは、全て1名のスタッフがリーダー、およびディレクターを務めた。これは、1人のスタッフが構造的に仕切ることにより、その場を構造化するという意図があり、グループマネージメントを円滑に行うという意図もあった。

以下に、セッション実施時の具体的な実施の意図について、アクティビティごとに述べる。

バス内でのレクリエーション まず、バス内でのレクリエーション（バスレク）についてである。今回のプログラムにおいては、参加者にとって初対面のスタッフも多くいたため、緊張感が高くなることが推測される場面であった。アイスブレイキングが必要な場面であり、そこで、自己紹介ではなく、他己紹介の形式をとった。1人ずつ発言の場を作り、自己紹介を行うのでは、「個別」を直接「学級全体」につなげることとなり、図6に基づくと、一段階飛ばした状態となる。そのため、対応しきれなくなる参加者がいることが想定された。他己紹介とすることで、その間の段階である「ミドルグループ」を入れることが可能となる。具体的には、まずバスの座席の近い人との間で自

己紹介を行った上で（ミドルグループ）、相手を学級全体に紹介する（学級全体）という構造化を行った。また、紹介する内容についても、他己紹介に先だって学級全体でプレーストーミングし、「何を聞いたらいいのかわからない」状況を回避した。この学級全体でのプレーストーミングによって期待される成果は、他己紹介が個別、もしくは1対1のものではなく、最終的には学級全体でスタッフも含めた参加者の情報を共有するという、同じ目標を達成するための枠作り、および構造の確認であった。

学級レク 次に、体育館での学級レクについて述べる。このセッションの目的は、楽しみながら、グループを形成するというものであり、最終的には、グループの規模を、学級全体とすることを目的とした。具体的な流れは、はじめにi) ストレッチを行い、次にii) 「人数集めゲーム」を行い、iii) 「魔法の絨毯」、最後にiv) 「人間知恵の輪」を行うというものであった。ストレッチは、「個別」の活動であるが、これは集団を形成する前段階として、個人が安心できる空間であることの確認を行うという意図があった。その上で、ミドルグループを形成することを意図して、「人数集めゲーム」を行った。ただ、これだけでは、ミドルグループが形成されたというだけにすぎず、ミドルグループ内で関係が生まれたということとはできない。そこで、「魔法の絨毯」を実施することで、ミドルグループ内での関係の強化を行った。これは、身体接触を伴うボディワークであり、より関係性を近いものにすることを意図していた。ミドルグループでの関係性が強化され、ミドルグループ内での安心を得た上で、次に行ったのは、ミドルグループを基盤にしたラージグループの形成である。これには「人間知恵の輪」を用い、男子グループと女子グループで実施した。これも「魔法の絨毯」同様にボディワークを伴うセッションである。「魔法の絨毯」よりも難易度が高く、リーダー的な存在がいることによって、早く解決することができる。本セッションでは、早く解決することを求める競争的要素は採用していなかった

が、お互いのグループの進捗状況を気にし、意識することで、ラージグループにつながることを意図した。学級レクでは、この後、体育館において安着便り（家族あてのはがき）の作成を行った。これは、ここまで述べてきたセッションが、いずれも活動レベルの高いものであったため、個別での静的な作業を行うことでのクールダウンを意図して行ったものである。

ハイキング はじめに全体で、ディレクター（本セッションを中心的に推進するスタッフ）から、課題の説明を行い、簡単なストレッチを行った。その後、各班で、スタッフから地図を見ながらのルート確認を行い、班（ミドルグループ）ごとに出発した。課題は、日頃生活している環境と、ハイキングで訪れている場所の違いを、できるだけたくさん挙げるというブレインストーミングであった。このセッションの意図は、個別レベルでは、周囲の環境に目を向けるというものがあ、またブレインストーミングによるグループ内での意見交換により、個別からミドルグループへの段階の上昇を意図することができる。さらに、各グループにスタッフを配することで、参加者の意見を丁寧に拾うことができ、正のフィードバックを提示することが可能となる。このことは、対人関係の活性化を意図している。いわば、個別の状態から、ミドルグループを介して、環境への関心にまでつなげるという、本プログラムにおいて、もっとも高い段階までつなげることを意図したセッションであった。ただし、ハイキングコースが5キロ程度と、体力を要するものであり、また参加者にとっては新規な場面であることから、実施前の不安が最も高いセッションでもあった。そこで、事前に地図を用いてルートを確認したり、コースの途中で遠景にゴールが見えるような行程にするなど、行程の視覚化を意図した動きを、スタート前、実施中に適宜設定するようにした。また、課題の設定は、周囲の環境に関心を持つという意図や、グループ内での相互作用の活性化という意図に加え、「目的なく歩く」ことから生じる退屈感を出る限り軽減するという意図も同時に合わせもつ

ていた。その為のツールとして、「気付いたこと」のデジタルカメラによる撮影も行った。写真撮影は個別の作業になるため、この作業を入れることによって、グループとして機能していても、常に個人的な感覚をもつ機会を意図することとなった。なお、ブレインストーミングの結果については、ハイキングコースのゴール後に、各班でそれぞれ確認作業を行った。

テーマパーク 3日目に行われたセッションである。参加者はすでに2日目に、ハイキングのセッションを体験しており、セッションが開始した時点でミドルグループが形成されていると考えた。そのため、このセッションでは、ミドルグループから、社会活動・地域参加を視野に入れた段階までの上昇を意図した。課題として提示したのは、グループごとにテーマパークのスタッフに対して、質問を行い、そのスタッフと一緒に写真撮影をするというものであった。この質問については、プログラム開始前から、学級の授業内で調べ学習の一環として考えてあるもので、それを、前日の夜のミーティングで確認して準備していた。このことによって、ミドルグループ内での安心感は強化されるという意図があり、その安心感に基づいて、社会参加が可能となるという流れを意図していた。

ミーティング ミーティングは、1日目、2日目の夜に実施した。1日目と2日目の流れは異なるものだったため、それぞれ別に述べる。はじめに、1日目のミーティングについては、その日の朝からのアクティビティについて、感じたことと、そう感じた理由について述べてもらった。これは、学級全体で集まっている場において、その場を仕切るリーダー（司会的役割）が、参加者に話を振るという流れで行われた。2日目のミーティングは、グループごとに、その日の午前中に行われたハイキングでのブレインストーミングのふり返りを行い、翌日のテーマパークでの質問の確認を行うという形でミドルグループを形成し、その関係性を強化した。その後、学級全体で輪になって座

り、午後のアクティビティで作成した工芸作品のタイトルを説明し、各自の作品を写真撮影したものをまとめて製本したカタログと共に、自分の作品を見せた。このような流れは、形成され、強化されたミドルグループを基盤とし、より高い段階の学級全体につなげるという意図があった。

ふり返り 図6には示していないが、最後に、3日間の日程を終え、学級に戻ってからふり返りを行った。これは、3日間の日程の間に撮影した写真を、BGMをつけ、スライドショー形式にしたものを学級全体で鑑賞するというものであった。これは、楽しい雰囲気のスライドショー形式にすることで、2泊3日のプログラムに対する正のフィードバックとして機能することを意図して行われた。

プログラム実施の成果

今回のプログラムの成果に関して、精神的健康の側面についての量的な測定結果については、橋本他（2011）に詳細が述べられている。本研究では、プログラム実施中に学級担当教諭から聞き取った内容や、スタッフ間でのミーティングの中で得られた情報からの質的な成果を述べる。

プログラム全体を通して、途中で脱落し、帰宅した生徒が見られなかったというのが、今回のプログラムの特筆すべき成果といえる。途中での脱落者の出現は、開発前のプログラム実施時には毎年見られていた。今回も保護者が宿舎の近くで待機するなど、脱落の危惧はあったものの、参加者全員、そろって帰ることができたのは、今回開発したプログラムに、一定の成果があったためと考えられる。次に、各アクティビティについて、成果を検討する。

今回のプログラムにおいて、事前の不安が最も高かったアクティビティはハイキングであった。ハイキングについては、開発前のプログラムにおいても実施されていたアクティビティであり、例年、実施時には、i) はじめから参加せず、宿舎で待機することを希望する生徒や、ii) スタート

地点まで行ったにもかかわらず、ゴール地点での待機を希望し、参加しない生徒、またiii) 途中で体調不良を訴えリタイヤする生徒が見られていた。しかし、今回のアクティビティにおいては、全員が参加し、全員そろってゴールすることができた。また、レクリエーションについても、事前に参加を嫌がっている生徒がいるとの情報を、担当教諭から得ていた。しかし、これについても、見学や、途中脱落の生徒は見られなかった。

プログラム全体を通して、保健室の利用者がほとんど見られなかったことも特筆すべき成果だと考えられる。通常時の学校においても、学級での不適応を感じている生徒による、保健室の利用率は高いといわれている。例年、宿泊学習時にも同様の現象が見られていたとのことで、毎年、看護師が同行する。しかし、本プログラムにおいては、虫さされのかゆみ止めや絆創膏を求めるなどの、短時間の保健室利用にとどまっておき、ほとんど利用者が見られない状態であった。

以上のように、これまでのプログラムにおけるアクティビティにおいては見られていた脱落者が見られず、不適応を感じる生徒にとっては「居場所」としても機能する保健室の利用が見られなかったというのは、各アクティビティ、ひいては本プログラムが一定の成果を上げたためと考えることができよう。

このような成果の理由として、以下の3点が挙げられる。i) 宿泊学習の内容について、上位概念から順に、プログラム、アクティビティ、セッションという形での構造化を行った点、ii) アクティビティ同士の連続性や、各セッションの方向性を整理したグループマネージメントを行った点、iii) アクティビティの運営に際しては、スタッフからディレクターやリーダーをたて、仕切ることによって、場を構造化するようにした点である。

以上のような構造的なグループマネージメントを行うことによって、各セッションを無理なく楽しむことができ、結果的にアクティビティを一つずつクリアし、プログラム全体を通して、脱落者がでないという成果が得られたと考えられる。さ

らに、最終的に正のフィードバックを呈示することができたため、学級全体でポジティブな体験を共有できたと考えることができる。いわばCsikszentmihaly (1975) によるフロー体験につながる体験を共有できたと考えることもできる。ただし、このポジティブな体験の共有も含めた、プログラムの長期的な効果については、今後もさらなる検討が必要である。

問題点の整理と今後の検討課題

今回のプログラムのアクティビティと従来のプログラムのアクティビティの比較 前述のように、本プログラムにおける最大の改善点は、構造化されたグループマネジメントを行った点である。その観点から見ると、従来のプログラムからのアクティビティである、工芸体験とバスレク内でのビンゴゲームは、アクティビティの連続性と、セッションの方向性にのせにくいものであった。いずれのアクティビティも、その前に既にミドルグループや学級全体が、1つのグループとして形成されているにもかかわらず、個別の作業が中心となるため、図6に示した段階の上昇が停滞してしまう。今後、これらのアクティビティを活かすためには、プログラム内でのアクティビティの連続性を視野にいれ、実施の順を検討する必要があると考えられる。

今回のプログラムの実施から見えた問題点 ミーティングは、本プログラムにおいて構造化を行ったが、1日目のものについては、問題点が見られた。活発な意見交換がなされなかったのである。これは、セッションとして行ったアクティビティのふりかえりを、学級全体で行い、グループでは行わなかったことが問題点として考えられる。つまり、ミドルグループを用いず、直接、学級全体に個人をつなげることとなり、図6の段階を一つとばした上昇となった。そのため、参加者の中に無理が生じ、グループとしてうまく機能しなかったと考えられる。ミドルグループを用いなかった理由としては、就寝時刻との兼ね合いで、時間短

縮の必要があったことが一因として挙げられる。この解決策として、タイムマネジメントに十分留意する必要性もあるが、セッションに柔軟性を持たせる場合のスキルも必要になってくると考えられる。

今後の検討課題 グループ形成が行われ、次の段階に進めようとする場合、形成されたばかりのグループの強化ではなく、解体につながるのが、係活動の存在であった。係と形成された、もしくは形成を意図しているグループは別の人員構成となっており、係の活動を行うためには、形成されたグループから構成員が抜ける形になった。係活動については、学校教育という場の特性上、必要なものであるが、今回のプログラムのような心理的支援を中心に考えると、目的に反する部分も明るみに出てしまう。プログラムの目的である集団への適応を達成する流れを止めず、むしろ促進する形での係活動の構造化を考えることが不可欠であり、結果的にこのような構造化が、教育的支援と心理的支援の間でのバランスをとることにつながると思われる。本プログラムは、集団（＝学級）への適応を目指すものであった。脱落者が見られなかったことから、これは達成できたと考えることができよう。この適応は、いずれ社会的自立につながるものとして、今後、本プログラムを改善したものを検討する際にも、具体的な目的に据えることができると考えられる。その一方で、プログラムによる成果の評価については、今後も様々な指標を用いて検討する必要がある。特に、今回はふれることができなかった、長期的な成果については、その後の追跡調査を行うなど、成果の定着も視野に入れた評価を行わねば、社会的自立につながっているかどうかを知ることができない。出席日数や、集団参加への様子をはじめ、より多くの指標を用いる必要がある。さらに、プログラム参加中は、いわば強制的にでも保たれる健康的な生活習慣については、生理指標を用いた睡眠リズムの測定と意識レベルでの指標の測定を総合的に検討するなど、さらなる研究が必要である。

引用文献

- 兄井彰 2004 キャンプ経験が不登校児童・生徒のコンピタンスと抑うつ傾向に及ぼす効果, 生活体験学習研究, 4, 25-34.
- Csikszentmihalyi, M., 1975 *Beyond boredom and anxiety: Experiencing flow in work and play*. New York: Jossey-Bass Inc, Publishers.
- (チクセントミハイ, M. 今村浩明 (訳) 2000. 楽しみの社会学 改題新装版 新思索社)
- 福島章 1989 性格と適応 本明寛・福島章・原野広太郎・依田明・安香宏・星野命 (編) 『適応と不適応 (性格心理学新講座)』金子書房 Pp 3-37.
- 橋本空・木村文香・福田一彦 2011 不登校の中学生への効果的な宿泊学習の検討 (2) -プログラム開発を目的とした生活習慣に注目した一考察-, 情報と社会(印刷中).
- 保坂亨 2000 『学校を欠席する子どもたち—長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会.
- 木村文香 2007 「居場所としての中学校の検討—X区第4波パネル調査から—」財団法人こども未来財団平成18年度児童関連サービス調査研究等事業調査研究報告書「不登校児支援のための地域連携ネットワーク構築に関する研究」(主任研究者: 酒井朗) 第4章 26-34.
- 児島邦宏 2007 文部科学省委託事業新教育システム開発プログラム (採択番号 20) 「体験活動の実態調査報告書」.
- Maton, K. I., & Wells, E. A. 1995 Religion as a community resource for well-being: Prevention, healing, and empowerment pathways. *Journal of Social Issues*, 51, 177-193.
- Maton, K. I., Hrabowski, F. A., & Greif, G. L. 1998 Preparing the way: A qualitative study of high-achieving African American males and the role of the family. *American Journal of Community Psychology*, 26(4), 639-668.
- 文部科学省 1992 登校拒否問題への対応について (文部省初等中等教育局長通知)
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19920924001/t19920924001.html (2010年11月29日取得)
- 文部科学省 2003 今後の不登校への対応の在り方について (報告)
http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2003/03041134.htm (2010年11月29日取得)
- 文部科学省 2009 豊かな体験活動推進事業 (拡充)
http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/08100105/025.htm (2010年11月29日取得)
- 内閣府政策統括官 (共生社会政策担当) 2009 高校生活及び中学校生活に関するアンケート調査 (高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査) 報告書
- 坂本昇一 1988a 児童生徒の集団宿泊生活の現状と課題, 教育委員会月報, 40 (2), 4-11.
- 坂本昇一 1988b 少年自然の家と野外教育活動—調査研究の結果から, 文部時報, 1336, 91-95.
- 笹尾敏明 2007 コミュニティ心理学とは ダルトン J.・イライアス M.・ウォンダースマン A. 笹尾敏明 (訳) コミュニティ心理学 個人とコミュニティを結ぶ実践人間科学 金子書房 Pp2-30.
- (Dalton, J. H., Elias, M. J., & Wandersman, A. 2001 *Community psychology: linking individuals and communities*. London: Thomson.)

※ 本稿は、平成22年度江戸川大学学内共同研究「不登校と生活習慣の関係およびその対応プログラムに関する心理学的研究」(研究代表者: 木村 文香) による補助を受けた研究に基づくものです。

(KIMURA, Fumika; Nakamura, Tateki and Hashimoto, Sora)